

寒中見舞いプロジェクト 活動報告

平成24年2月11日(土)
山内聖

寒中見舞いを集めるにあたって

- 被災地に行けなくても応援できる物質的な面だけでなく精神的なささえになり、少しでも心に寄り添ったサポートがしたいという目的は、ハッキリしていても寒中見舞いに馴染みがなく堅い感じになってしまう
- 周りの方に告知をしても、不特定の方向けにハガキを書くことに抵抗がある
- 文面や表現に難しさがある
- 被災地の方々の状況、寒中見舞いの主旨をより深く理解したうえで参加していただくには……
- 個人情報(今後へのつながり、ハガキを受け取った方がどう思われるかから、名前、住所の記載を条件)



どのように参加を呼び掛けたか？

- ①中日新聞県内版での告知(ボランティアバス参加者の協力)
- ②事前の防災フェスタのブースにて寒中見舞いコーナーを作り、直接呼びかけ参加を募った
- ③レスキューのボランティアバスに参加経験者へのアピール
- ④市役所(社会福祉協議会)、病院、障害者福祉施設の方々、読み聞かせボランティア、保育士さん、小学校など、被災地の方々への関心が高い方たちのむけてアピールして共有して頂いた

(例)岡崎市社協は、岡崎市の第一次ボランティア派遣先が七ヶ浜であり職業上でも同じ社協の方たちの苦勞がわかり応援したいということでした。
・小学校(学校単位で参加)では、高学年に対してボランティアの体験、被災地の状況を授業でつたえ、少しでも多くの情報を知り子どもたちが考え気持ちを込めた寒中見舞いを書いていただくことができました

どのように参加を呼び掛けたか？

(総括)
多くの方に参加していただくということは、「被災地の今を思う、考える」ことにつながり、被災地への関心を高め、また新たなサポートへと繋げる大きな力となります。
「THE・ボランティア(力仕事・片付け)」から、深く考え被災地のニーズにあったボランティアを今後も継続して行うことが必要です。



現地の方々の生活状況・現状

- ①仮設単位において、つながりが生まれつつある場所とそうでない場所がある



集会所を今後どう活かしていくかが課題
利用者が限られてしまっている感もある

- ②女性のパワーは強く、明るく元気のある方が多いが、逆に男性(高齢)は、仕事上のつながりのみとなり、孤立し一人であるケースも目立つ
- ③最低限の住まい環境のみで、生活への余裕は、まだまだない
・日常生活の活気までには至っていない、また、働く意欲も衰えてしまった方もいる(職をを変えることへの抵抗もある)

現地の方々の生活状況・現状

- ④最終目標が決まっていないので、復旧のメドは、定まらない個人や被災地域により復旧目標は、様々でまだ道筋は、できていないといえる
- ⑤仮設住宅環境は、元々不適切な場所でも住宅建設最優先で建てたため、対応力がスムーズにいかず、二度手間な面がある
- ⑥今も工事中の場所も多いが、工事関係者は不足している(地方から集まっている)



求人広告しても集まらない

まとめ

住宅環境面の日常は戻ってきていても、すぐには作り出せない人と人との信用・安心を地域とともにより細かくサポートして作りだしていくことが必要。

大きなイベントに頼らず継続的な触れ合いや会話できる多くのボランティアが必要といえます。

